

音声教材 BEAM 事例

通常の学級における一斉授業の中で、音声教材 BEAM を活用した中学校の事例

目的：

事例校は、文部科学省による不登校対応のモデル校であり、生徒たちの多様な学習履歴や、学び方の違い等に対応した学習を保障することをねらいとする。

方法：

WISC の結果や通常の授業の様子から、音声による情報理解が比較的得意ではないかと想定される生徒を 17 名選出。

iPad mini に、音声教材 BEAM を事前にダウンロードして用意した。(クラス全員分用意) 社会科の一斉授業で、授業の最初に 5 分間の予習の時間を設け、音声教材を活用する生徒は、時間内は繰り返して聞いてよいことや、その際に教科書を見る、見ないは自由であることを確認した。

また、授業の最後に学習の振り返りを行い、確認プリントで理解の定着をみた。

結果：

通常授業で多動傾向のある生徒が集中して参加したり、私語が多い生徒にも授業に関係ある発言が出たりした。また、毎回途中退出を希望する生徒が、音声教材を何回も聞いて最後まで授業参加するといった変化がみられた。さらに授業後の確認プリントの正答率が変化した。(成績向上群 = 9 名 変化なし群 = 3 名 変化なし群 = 5 名)

考察と今後の課題：

- ・正答率の変化から、比較的「言語理解が高く、ワーキングメモリーが低い」タイプの生徒に効果がみられる傾向があることがわかった。
- ・授業の開始後のすぐの活用が、クールダウン効果や授業の見通しをたてることにつながり、集中力の向上という結果を得たと考えられる。
- ・ADHD 傾向のある生徒には、ヘッドホンの装着により余計な聴覚刺激が遮断されるため、集中しやすい環境となったと考えられる。
- ・感覚過敏の生徒にとって、イヤホンやヘッドホンの装着感は課題として残る。
- ・今後は反転学習としての活用を推進していく。登下校の時間の積極的な活用という意味から、携帯電話やスマートフォン・MP3 プレーヤーなどを活用する。
- ・継続的な活用のために、積極的な利用を呼びかけ、三者面談を通じて紹介、決定していく。
- ・欠席の多い生徒の補完的な活用も視野に入れていく。